サンティアゴ巡礼路「フランス人の道」

大 原 志 麻（静岡大学人文社会科学部准教授）

The Camino de Santiago – Walking the French Way

Shima OHARA
Associate Professor, Faculty of Humanities and Social Science, Shizuoka University

The Camino de Santiago pilgrimage that leads to the holy city of Santiago de Compostela was one of three large Christian pilgrimage routes in Europe during the Middle Ages.

Santiago de Compostela is on the fringe of the Galicia region in northwest Spain, and at places along the Santiago pilgrimage route there are tales of people who were saved from dangers on the road by Santiago.

There is a wide range in the types of images of Santiago wearing the same attire as a pilgrim, which creates a feeling of closeness to the saint, but there are also various similarities between the Santiago and Shikoku pilgrimage.

Nowadays, there is an increasing trend in pilgrimages and the flow of people going to Santiago de Compostela is not decreasing, but nowadays people go for a wide range of motives which are different from the traditional sense of values present during the Middle Ages in Europe.

Pilgrims tie a scallop to their belongings, hold a staff, carry a knapsack and make their pilgrimage, but in many cases not for reasons of faith. The pilgrimage has become part, in the broad sense, a leisurely activity including some tourism.

The Camino de Santiago pilgrimage has a long history and is very well-known, but this style of making a pilgrimage is a relatively new phenomenon and so far, little research based on fieldwork has been carried out.

In this paper, I will introduce various aspects of the present Camino de Santiago pilgrimage with things that I experienced when walking as a pilgrim the “French Way” – one path of route that goes east to west along the northern part of the Iberian Peninsula.

はじめに

聖地サンティアゴ・デ・コンポステラを目指すサンティアゴ巡礼は、中世ヨーロッパ世界におけるキリスト教三大巡礼路の一つであり、『偽チュルパン年代記』にあるように[1]シャルルマーニュの時代より多くの巡礼者が足を運んできた。サンティアゴ・デ・コンポステラは、スペイン北西部にあるガリシア地方という周縁的な場所にあり、サンティアゴ巡礼路の随所には、路上の危機をサンティアゴに救われたという説話がある。巡礼者と同じ姿をしているサンティアゴ図像の類型の分布範囲はかなり広く、聖人が身近に感じられていることがわかるが、サンティアゴ巡礼にはこのように四国遍路との様々な類似点がみられる。今日、巡礼は拡大傾向にありサンティアゴ・デ・コンポステラを詣でる人はひきもきらないが、それはヨーロッパ中世以来の伝統的価値観とは異なる幅広い動機から行われている。巡礼者はホタテ貝を括りつけ、杖を持ち、リュックを背負って巡礼を行うが、多くの場合信仰的なものではなく、巡礼は観光を含む広義の余暇活動の一部となっている。サンティアゴ巡礼は歴史が長く認知度は高いが、こうしたスタイルの旅自体は最近起きた現象であるため、フィールドワークに基づく研究はまだ多くない。本論では、サンティアゴ巡礼路の一つでイベリア半島の北部を東西に貫く「フランス人の道」と呼ばれるルートを徒歩巡礼する中で得た実感を交えながら、現在のサンティアゴ巡礼の諸相について紹介したい[2]。

1. サン・ジャン・ピエ・ド・ポーからロンセスバジェス

本稿で主に取り上げるフィールドは、サンティアゴ巡礼路のひとつでイベリア半島の北部を東西に貫く約

800kmの「フランス人の道」と呼ばれるルートである。12世紀の『カリクスティヌス写本』(*Codex Calixtinus*)第５書『巡礼案内記』(以下『案内記』)に「このようにブルゴーニュ人とチュートン人はピュイの道を経由し(中略)ロンセスバジェスにおいてピレネー山脈を越え、北スペインの「フランス人の道」を歩く」[3]とあるように、「フランス人の道」のなかでも一番多く巡礼者が通るル・ピュイ[4]から歩き始めるポピュラーなルートである。しかし日程の都合もあることから、フランス側の終点で、現在最も人気のあるスタート地点であるサンジャンから巡礼を始めることとした。

巡礼の街サン・ジャン・ピエ・ド・ポー(以下サンジャン)は、サンティアゴ巡礼路の中でもエンブレマティックなナポレオンルートの起点となる街である。マドリッドからは、まずパンプロナに向えば、そこのバスターミナルではSaint Jean Pied de Port行バスの大きな看板が出ているので、非常にわかりやすい。しかし今回は、別の調査の都合上、マドリッド到着後、一路サン・セバスティアンへ向かった。サン・セバスティアンもサンティアゴ巡礼路沿いの都市で、「フランス人の道」に次ぐ人気ルート「北の道」上にあるが、巡礼事務所もあったものの、開いている時間は短く、道標も巡礼者も見られなかった。

図１ サン・ジャン・ピエ・ド・ポー(筆者撮影)

サン・セバスティアンからサンジャンに向かうため国境を越えようとした日は、G７ビアリッツ・サミットと重なっており、サミット反対派の人びとに国境がブロックされ、物々しい厳戒態勢にあった。バルセロナまで回らなければフランスに入れないとまで報道されていたものの、バスク人が「ウナムーノ[5]だって亡命できたのだから」と抜け道を見つけてくれ、車ですんなりとサンジャンに到着することができた。

図２ スペイン門[6](筆者撮影)

サンジャンは、赤い屋根が連なるメルヘンチックなバスクの村々の一つで、赤い色は腐敗防止のため血を混ぜて作っているという俗説がある。

まず巡礼事務所に赴き２ユーロで巡礼手帳(credencial)を入手し、別に２ユーロを寄付して帆立貝をもらう。帆立貝は古代ギリシア・ローマにおいて愛の象徴とされ、妖術、悪運あらゆる種類の病気を避けるために身につけられていた[7]。本来、貝殻は単に巡礼の標識にすぎなかったが、巡礼の隆盛とともに次第にサンティアゴその人を示す象徴に転化し[8]、キリスト教の図像として帆立貝はサンティアゴ

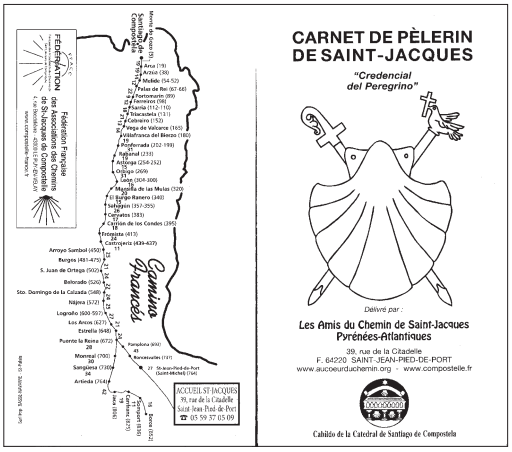

図３ 巡礼手帳(credencial)

図４ スタンプ(sello)

崇敬にしか姿を表さなくなった[9]。

『案内記』には、シャルルマーニュがイベリア半島に向かうために通ったというイデオロギー的な理由や輸送に用いられていたなどの理由により、ピレネー山脈からロンセスバジェスに向かうのはほぼ唯一のルートであるとされている。今日ロンセスバジェスに向かう道は、山岳部を歩くナポレオンルートと国道沿いのバルカルロスを経由する新道の二つである。ナポレオンルートは、ナポレオンがスペイン遠征の際に通ったルートで、新道と異なり巡礼気分がよりよく味わえるが、安全にピレネー越えができるのはごく限られた夏の天気の良い日のみである。今回天候の問題はなかったものの、それでも巡礼事務所では、ナポレオンルートが“Très très difficile”（とても難しい）と何度も諭された。実際にピレネーは崖が多くて風が強く、少しの天候不順でかなり危険となることが予想され、例年遭難者や死者がでるのも頷ける。

また、荷物は体重の10分の１までにすることとあったが、何を減らしていいかの判断がつかず、荷物を運んでくれるサービス（servicio de transporte）が一区画３～４ユーロであったものの、自分の荷物を持たなければ巡礼したうちに入らないように思いこみ、12.8 kgの荷物を持ってピレネー越えをすることとなった。実際のところ巡礼者の多い「フランス人の道」では、ランドリーサービスが充実しており、着替えもいらない程なので、サリアからは荷物を半分以上減らして不要な荷物は目的地に送ってしまった。

図５ ウント（Huntto）（筆者撮影）

体力に自信がなくコースタイムに大きく遅れることが予想されたため、まだ真っ暗で誰も動き始めていない５時半に出発したが、ヘッドライトをつけても辺りが暗過ぎてなにも見えず、余計に道に迷いそうになった。巡礼事務所のいうように、早すぎる時間に出ても利点はなく、せめて夜が明け始める６時半出発が妥当であったように思う。いきなり霧ばかりの険しい登りが続き、自動販売機のあるウントと、ピレネーで最後に食事と水が供給できるオリソンまでの登りで既に消耗しきってしまった。ピレネーを一気に越えずに地図上序の口にあるオリソンで一泊するのも一計である。オリソンのトイレは電気がなく真っ暗で、列を作っていた人びとが口々に「村のトイレだ」（baño de pueblo）という感想が漏らしており、ヘッドライトを持っていると何かと便利だった。

図６ オリソン（Orisson）（筆者撮影）

オリソンを越えたあたりから雲が下に来て、標高800mくらいだが『案内記』にあるように「天に手を伸ばせるようにおもえる程」[10]上ってきたような気に

図７ 図８ オリソンを越えた辺りのナポレオンルートからの風景（筆者撮影）

図９ レポデエル峠（筆者撮影）

図10 レポデエル峠から見た
ロンセスバジェス（筆者撮影）

図11 ロンセスバジェスの
サンティアゴ教会（筆者撮影）

なる、唯一無二の山岳のパノラマが広がる。

巡礼は信仰的なもの、巡礼の旅は一人でやるものという考えもあるが、筆舌に尽くしがたいほどきついピレネー越えでは、ほとんどの巡礼者が “¡Buen Camino!” の声を掛け合い、話をしながら熱く連帯して乗り越えていった。20年前に巡礼をしたスペイン人の友人は掛け声が “Ultreya”（どんどん前へ）だったと言っていたが、今回の巡礼では聞かれなかった。中世の巡礼者たちは、途中で力つきてしまうと旅が終わり誓いを放棄することになるため、自分の体力と気力が低下することを恐れて、歌い、笑い、おしゃべりし、励ましあい、助け合いながら前進した[11]とあるが、声を掛け合うことは踏破する上での大きな励みになったように思う。

昼過ぎ頃までにローランの泉の手前に到着すればフードトラックが来ていてスタンプ（sello）を押してくれる。標高1430mのレポデエル峠に着くと眼下にロンセスバジェスが広がる。しかし下りは目的地が視界に入ってからが長く、直線距離だと距離は短いが急勾配が危険ということで巡礼事務所から通らないようにいわれていたため、迂回した新道からロンセスバジェスに入ることとなり、さらに遠くに感じた。

『案内記』に「サンティアゴに赴くのに山を登攀したくない巡礼者が多く通る」[12]と記されるロンセスバジェスは、現在も住民21人の小さな村に巡礼者が溢れかえっているため、なかなか対応が行き届かず、アルベルゲも数々の巡礼記において最も評判が悪い。こちらはスタンプをもらいに寄っただけだが、疲れ切っているのに、受付の人がWhatsAppの書き込みを長々と優先した上に対応が悪かったことには閉口した。宿泊施設はこのアルベルゲと隣接する３つ星ホテル、バルの二階が小さなペンシオンとなっているのが全てで、バルは２件のみである。もう少し先の、ヘミングウェイがマス釣りのために滞在したことで知られるブルゲテには宿泊施設も多く、選択の幅が広くなる。

サンタ・マリア教会での18時の巡礼者向けのミサは、巡礼路が辛かっただけに感動的だった。サンティアゴ巡礼路の世界遺産指定をめぐる記事についての意見の中で、「ユネスコの事務局長がサンティアゴ・デ・コンポステラ大学から名誉博士号をもらったという。記事によるとフランス政府は、カミーノが「文化と自然が交錯する越境的な場所である」という表現をスピーチに加えるよう頼んだとか。しかしだ。奴らのうち何人が、山を越えただろうか？　エレガントなサロンではなく、一人きりになって野外にある何かの秘密を探そうとしただろうか？　雨に濡れ、寒さに凍え、疲労困憊になって宿に到着しただろうか？」[13]というものがある。実際に歩いて経験されるサンティアゴ巡礼路は、研究者が議論するような抽象的なものとはかなり性質

が異なるということがピレネー越えによって特に実感された。

ロンセスバジェスは、ナバラ王サンチョ７世剛勇王と武勲詩『ローランの歌』で知られる村である。交通の便としては午前中に二本のパンプロナ行きのバスがあるのみであるため、徒歩巡礼はロンセスバジェスを訪れるよい機会となった。ロンセスバジェスは、巡礼姿のサンティアゴ像があるサンティアゴ教会と、1212年のラス・ナバス・デ・トロサの戦いに加わったサンチョ７世の墓、サンタ・マリア教会の博物館、そして８～９世紀に創られたシャルルマーニュの礼拝堂など見所が多い。

シャルルマーニュの礼拝堂の発掘作業は進んでいるものの、まだロンセスバジェスで亡くなった巡礼者の骨しか出てきていない。『ローランの歌に』「昨日ロンスヴォーにて、戦がござりました。ローランを初めとして、伯オリヴィエ、年頃シャルルの愛しみ給える十二人衆の面々は、フランス方の兵二万もろとも、ことごとく討ち死にいたしました」[14]とあり、また『案内記』にシャルルマーニュの軍隊が大勢亡くなったと記される[15]、フランク軍戦死者の層にはあと５年ほどで到達するそうである。

２. ログローニョ

ロンセスバジェスからはバスでパンプロナを経由してログローニョまで移動した。ログローニョは、『案内記』に「よいパン、最上のワインと肉と魚が豊かにある、幸運に満ちた地」[16]とあるように、今日もリオハワインの産地として有名なラ・リオハ州の州都であり、美食の街としても知られている。Renfe（スペイン国鉄）の窓口の方が「どこから来るにも不便な場所」と言っていたが、その分あまり観光慣れしていない古き良きスペインの雰囲気が保たれており、道を歩いていると挨拶して話しかけてきてくれたり、美味しいお店を教えてくれたり、お店の中でも親切にしてくれる人が絶えなかった。

ログローニョのサンティアゴ教会は、サンティアゴ信仰の説教が行われていた場所に844年のクラビホの戦いの後に建てられたロマネスク様式のものであるが、これは火事で焼失してしまった。その後1513年から1527年に教会が再建、1570年から1573年にかけて塔が建設された。ファサードのサンティアゴ像は「イスラーム教徒殺し」のマタモロス像（Matamoros）として知られているが、馬で蹴散らされている人は明らかにイスラーム教徒ではなく、ヨーロッパ人の顔をしている。サンティアゴの図像の一つである「イスラーム教徒殺し」（Matamoros）は、その後ラテンアメリカ世界で「インディオ殺し」（Mataindios）へと類型を増やし、さらにはフランコ期に「共産主義者殺し」（Matacomunistas）のサンティアゴへも転じていった。信仰・信条が異なる敵

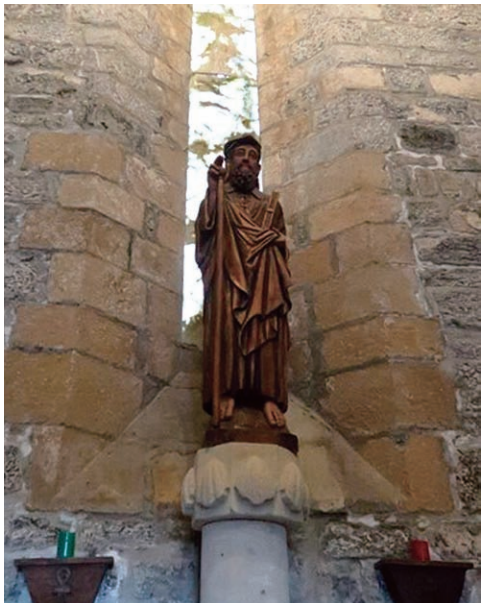

図12 同教会内部の巡礼者姿のサンティアゴ像（筆者撮影）

図13 サンティアゴ教会（Santiago el real）のマタモロス像（筆者撮影）

図14 サンティアゴ教会の巡礼者姿のサンティアゴ像（筆者撮影）

図15 モンフォルテ・デ・レモス（筆者撮影）

図16 サリアの城塞（筆者撮影）

図17 巡礼路沿いの牛（筆者撮影）

との戦いに加護を与えたサンティアゴ崇敬の形態から考えると、ログローニョのサンティアゴ教会の正面に描かれているのは「フランス人殺し」のサンティアゴの可能性がある。教会の資料によると、この教会は1521年のフランスとの戦いの際に郷士（hidalgo）が集まっていた場所であり、教会か建設された年代とも合致するため蓋然性が高い仮説といえよう。

ログローニョ近郊のクラビホの奇跡のあった古戦場までは18km、また世界遺産ユソ修道院とスソ修道院のあるサン・ミジャン・デ・ラ・コゴージャまでは42.7 kmと、観光案内所によるとログローニョから訪れるにはかなり時間がかかるとのことで今回これらを訪れるのは見送った。

3. サリア-ポルトマリン

ログローニョからサリアへは電車で向かうべく切符を購入したが、本数が少なく不便な上、電車が始発駅を出発しなかったと言われ、一部区間がバスで代替された。途中の乗り換えでガリシア平定を目的としたカトリック両王によるサンティアゴ巡礼の要因となる反乱を起こしたレモス伯[17]の領地（レモス、カストロヘリス、トラスタマラとサリア伯領）の中心地モンフォルテ・デ・レモスに立ち寄ることができた。21世紀入ってから鉄道開通の記念碑が建てられていたが、それほどまでに嬉しいことだったのだろう。

サリア駅に到着してすぐのところに四国遍路の石碑がある。この石碑は巡礼路の要所要所で見られ、それがサンティアゴ巡礼路の道標（mojón）と似ていることから、お遍路の石碑を辿ることを「日本人の道」（el camino japonés）と呼ばれている。サリアにはエンリケ・デ・トラスタマラがデュ・ゲクランに譲渡した城塞があるなどトラスタマラ内戦とも所縁が深い。ハイシーズンにもかかわらず、サリアは意外にも閑散としており、サリアの手前のオ・セブレイロから巡礼を始める人が多いことから、途中にあるペンシオンやアルベルゲに泊まる人が多いようである。

終点であるサンティアゴ・デ・コンポステラまで100キロメートル以上歩くことによってマルタ騎士団から伝統的巡礼者として承認されるため、サリアからの巡礼は巡礼者の数が最も多く、列をなして歩いている。そのため巡礼者間の連帯感は希薄で、“Buen Camino”の声を交わすこともほとんどなく、本格的な巡礼らしかったピレネー越えと比べると、観光地的な喧騒に包まれ、ゴミが目立つようになる。それでも景色はよく、整備されており、適度にバルや清潔なアルベルゲがあるので快適である。なお「危険がいっぱいな道」[18]だった時代とは異なり、巡礼路全般において誰もいない早朝の時間から歩き始めても安全で危険を感じたことはなかった。サリアを出て『案内記』にもあるバルバデロ（Santiago de Barbadellu）[19]のゆっくりできるバルで

朝食をとり、ポルトマリンへ歩を進めると、牛糞と水肥の臭いが漂いだす。「牛糞の臭いがするガリシア人」や、マドリッド北駅にあった表示の「刈入れ労働者（ガリシア人）と犬用」[20]などといった19世紀以来の不当な差別やそれに対して憤慨した、ロサリア・デ・カストロの詩「カスティーリャのカスティーリャ人たちよ」[21]が頭の中で反芻された。

カーケリングによれば、サリアとポルトマリンの間に魔女の谷（Valle de las brujas）[22]があったようで、イベリア半島では珍しく魔女伝説の多いガリシアならではのものだけに確認したかったが、自分のリュックを背負い続けるだけで手いっぱいで他のことが何もできなかったのが返す返すも残念である。

ポルトマリン（Pons Minee）はかつてのテンプル騎士団領で、1963年のバレサル・ダムの建設により現在は廃墟となってしまっているミニョ川にかかっていた古い橋により、サンティアゴ巡礼路の重要な宿場とされていた。貯水湖に沈む前に移築されたロマネスク様式のサン・フアン（San Xoán）教会があり、近くにはサンティアゴ騎士団の最初の拠点があった。

ポルトマリンは豊かで人びとが穏やかでサービスがよく、うなぎのフリットが名物で、ガリシア牛がマドリッドのレストランと比べると破格の値段で食べることができ、リアス・バイシャスのワインが堪能できる居心地のよい村である。スペイン人の成人の半分以上が肥満[23]で、肥満が原因で131,000人が亡くなっているスペイン[24]では、宗教的な厳粛さ以上に「巡礼したら３キロ痩せる」が巡礼の切実な動機となっているようにも思えるが、それに矛盾するトピック「巡礼路沿いは食事が最高」をより楽しめる場でもある。

４. ポルトマリン―パラス・デ・レイ-アルスア

サリアからの第一段階は、巡礼というより観光のような気楽さがあったが、第二段階も引き続き適度な間隔でバルが営業しており休憩できる場所が多く、紀元前４世紀のカストロマジョール遺跡などの見どころもある。しかし、パラス・デ・レイまでは長い登りが続くハードな道程で、故障者が座り込んでいるのがしばしば見られ、タクシーが多く行き来しておりここで断念した人が多いことが察せられる。道標の落書きには「神はお前がタクシーで来たことを知っているぞ」という連作も見られた。こちらも疲労困憊してしまったため、宿にたどり着くのが精いっぱいで、パラス・デ・レイにあるロマネスク様式の教会の動物が彫り込まれたコーベルのタンパンを見ることが出来なかったのが残念である。なおパラス・デ・レイの中心部にも四国遍路の石碑がある。

図18 巡礼路沿いの高床式穀倉（hórreo）
（筆者撮影）

図19 ポルトマリンの橋（筆者撮影）

図20 道標の落書き（筆者撮影）

図21 カストロマジョールの遺跡（筆者撮影）

図22 四国遍路の石碑（筆者撮影）

図23 サンティアゴ教会
（Santiago de Boente）（筆者撮影）

ちなみにパラス・デ・レイのパラスは「宮殿」(palatium) に由来しているのかと思っていたが、実際には先ラテン語の「岩がちの土地に自然にできた穴で羊飼いと家畜の避難小屋」を意味するpaleiraに由来しているようである。[25] パラス・デ・レイを出てカサノバで朝食を摂ったあとのアルスアまでの区間は、肉体的に相当にきつい過酷な歩きで、"Rompe pierna"（足壊しの道）と呼ばれている。蓄積した疲れのせいからか巡礼路はテーピングをしている人だらけになる。巡礼者の数が減るため開いているバルも減り、日本と異なり公衆トイレが存在しないため、余計に長く感じた。なお例のごとく噛み付き野犬が出たとの報道があり道中緊張もした。事前には、シャーリー・マクレーン[26]のように巡礼中に前世の記憶が蘇ることを期待していたが、この頃になると頭にあるのは「足が痛い」のみとなり、一切を忘れ歩く途上にいることに夢中になっていた。途中に蛸で有名なメリデという大きな街があるが、有名店エセキエルで食事をするどころではなく、ウジョアのチーズも消化できないほど疲れ果てた。しかし大変な分、巡礼者同士の顔見知りがかなり増え、ピレネー以来の連帯感が生じるようになる。

メリダの先にあるのがボエンテ（Boente）で、教会内のサンティアゴ像で知られる。教会が閉まる直前にサンティアゴ像を見ることが出来たため、メリデに長居をしなくてよかったかもしれない。ただ自分の体力を鑑みると、この行程については、メリダもしくは宿泊施設の多いリバディソ・ダ・バイショで一度区切った方がよかったように思う。実際メリデで巡礼をやめてアルスアまで車でショートカットする人がおり、「一緒に乗っていきなよ」「荷物だけでも宿に運んでおいてあげるよ」という親切なスペイン人の厚意に甘えないようにするのが大変であった。しかし耐えたお陰で、死ぬほど疲労しても朝起きると動けるようになり、巡礼を続けようという気力が不思議と蘇る、死と再生という中世の巡礼の意味するところや、不便や苦痛という贖罪を体験することができたように思う。

巡礼は本来信仰的で一人でするはずのものではあるが、サリアからの巡礼路は巡礼者でいっぱいで一人で孤独を噛みしめて歩くにはそぐわない。巡礼者たちの出発の動機も、前述のようなスピリチュアルから、巡礼路沿いに点在する教会建築の探訪、健康改善、家出などきわめて幅広く、巡礼路で漏れ聞く会話は、世間話、ガールズトーク、トレッキング経験談、悪口、噂話、少女が父親と携帯電話で喧嘩しながら「一人でどれだけできるかを試す」と話しているなどとても世俗的で、統計以上に敬虔なカトリック信徒は少ない印象を受けた。[27] さらに敬虔なサンティアゴ崇敬を動機とする巡礼者は今日ごく少数派であろう。しかしこのような現代的な動機の置き換えがありながらも、教会側の

ルールの原理を支える「肉体的犠牲」「自己懲罰」「歴史・伝統性」に従う側面もまだ存続しているようにも考えられる。

5. アルスア―サンティアゴ・デ・コンポステラ

アルスアからラバコジャまでの行程は一番長く、途中のオ・ペドロウソに宿泊する人が多い。景色も見慣れたガリシアの田園風景に街の喧騒が混じり始め面白くなくなる。ゴミも増え、体験巡礼目的の一区画のみの巡礼者が急増し、ずっと巡礼をしてきた顔なじみのグループと二つに分かれる。ラバコジャからの道では住民による「ゴミを捨てるな」の英語の看板が目立つ。サリアからの巡礼者は巡礼路沿いの住民に概してあまり歓迎されておらず、四国巡礼における「いい人しかいないお遍路」のおせったい[28]、とはかなり雰囲気が異なる。

歓喜の丘（Monte do Gozo）からサンティアゴ・デ・コンポステラの大聖堂が物理的存在に見えてからが遠く、肉体的には歩くことにも慣れ、リズムの取り方もわかってきていたとはいえ、「見えているのにまだ着かない」という心理的な負担を抱えつつも、街の人たちに「あと数ミリだから」と励まされながら、なんとか到着することができた。想像以上に疲れたため、サンティアゴ大聖堂に到着すると、向かって左手にあるオブラドイロ広場に面したパラドール（Hostal Reis Catolicos）に宿泊した。15世紀のルネサンス様式の建物で中に博物館もあるため、外にでる体力がなくても滞在を充実させることができる。パラドールに向かって左手にある小道に入り100メートルほどのところにマルタ騎士団が管理する巡礼事務所がある。そこで順番を待って、国籍、出発地、徒歩か自転車かといった巡礼の手段、そして動機（宗教、スピリチュアル、スポーツから選択）などに答え手続きをする。巡礼証明書をもらうのは困難だと聞いていたが、容易に発行してもらうことができた。巡礼証明書はA４のクリアファイルに入るサイズだが、走破距離の証明書は大きくて有料で、さらにそれを入れる筒も

図24 サンティアゴ・デ・ボエンテ教会の巡礼者姿のサンティアゴ像（筆者撮影）

図25 サンティアゴ・デ・ボエンテ教会のサンティアゴ騎士団の旗を掲げたマタモロス像（筆者撮影）

図26 歓喜の丘（monte do Gozo）（筆者撮影）

図27 工事中のサンティアゴ大聖堂

Capitulum huius Almae Apostolicae et Metropolitanae Ecclesiae Compostellanae, sigilli Altaris Beati Iacobi Apostoli custos, ut omnibus Fidelibus et Peregrinis ex toto terrarum Orbe, devotionis affectu vel veri causa, ad limina SANCTI IACOBI, Apostoli Nostri, Hispaniarum Patroni et Tutelaris convenientibus, authenticas visitationis litteras expediat, omnibus et singulis praesentibus inspecturis, notum facit:

Shiwa Obara

hoc sacratissimum templum, perfecto itinere sive pedibus sive equitando post postrema centum milia metrorum, hirota vero post ducenta, pietatis causa, devote visitasse. In quorum fidem praesentes litteras, sigillo eiusdem Sanctae Ecclesiae munitas, ei confert.

Datum Compostellae die 03 mensis Septembris anno Dni 2019

Segundo L. Pérez López
Decanus SAME Cathedralis Compostellanae

Omnes dies et noctes quasi sub uno sollemnitate continuato gaudio ad Domini et apostoli decus ibi excoluntur. Valve eiusdem basilice minime clauduntur die noctuque, et nullatenus nox in ea fus est haberi atra (cf. Ap 21, 25), quia candelarum et cereorum splendida luce ut meridies fulget". (Códice Calixtino)

El Cabildo de la Santa Apostólica Metropolitana Catedral de Santiago de Compostela sita en la región occidental de las Españas, a todos los que vieren esta carta de certificación de visita, hace saber que:

Shiwa Obara

ha visitado la Basílica donde desde tiempo inmemorial los cristianos veneran el cuerpo del Beato Apóstol Santiago.

Con tal ocasión, el Cabildo llevado del deber de caridad, al tiempo que con gozo, le dan al peregrino el saludo del Señor y piden -por intercesión del Apóstol- que el Padre se digne concederle las riquezas espirituales de la peregrinación, así como los bienes materiales. Bendígalo Santiago y sea bendito.

Dada en Compostela, Meta del Camino de Santiago, el día 03 del mes Septiembre del año 2019

Despues de realizar 139 Km. Desde Baiut Sero Pedo de Port - Samia donde comenzó el 25 de Agosto del 2019 por la ruta del Camino Francés

Segundo L. Pérez López
Dean de la SAMI Catedral de Santiago

図28 巡礼証明書

図29 距離の証明書

図30 サン・フランシスコ教会の巡礼姿のサンティアゴ像

図31 フィニステレの山火事（筆者撮影）

図32 サンタ・マリア教会（Igrexa de Santa María das Areas）（筆者撮影）

図33 サンタ・マリア教会の巡礼者姿のサンティアゴ（筆者撮影）

有料で売られている。

巡礼証明書を手にして巡礼の終了を実感し、近くにあるコインランドリーで装備を洗濯し、向かいにある郵便局からもう使わないトレッキング用品を送るとあっけなく日常生活が戻ってくる。残念ながら大聖堂が工事中でサン・フランシスコ教会での巡礼ミサとなったが、巡礼中リュックサックの荷物を如何に軽減しようかとばかり考え、また実際そんなに必要なものはなかったことから「日々重たい余計な荷物を持ちすぎている」という説教のくだりに大いに共感した。

6. フィニステレ―ムシア

サンティアゴ巡礼路にはヨーロッパ極西に位置する「地の果て」を意味する「フィニステレへの道」(Finisterre) がある。中世後期にはフィニステレまで巡礼するケースが多かったが[29]、今回は徒歩巡礼者を横目に見ながら、サンティアゴ・デ・コンポステラからバスでフィニステレへ向かった。中世では西の果て信仰からこの地を巡礼の旅の終着点とし、身に着けていた衣類を燃やしたとされているが、現在、衣類等を燃やすことや遺棄することは禁止されている[30]。ガリシア地方は山火事が多く、サリアからの巡礼路でも大きく黒焦げになったところがあったが、フィニステレでは巡礼者による放火で逮捕者も出ている[31]。実際私の滞在中にも山火事があった。風が強いせいかと思っていたが、こちらも放火であった。

フィニステレの中心地からフィニステレ岬の巡礼路到達点0キロの道標まで3kmほどのところに、途中にロマネスク様式のサンタ・マリア教会があり、入口のところに巡礼者姿のサンティアゴ像がある。

フィニステレに一泊し、午前中のバスでムシアに向かう。リアス式海岸なので分かりにくいが、地理的に本当の西の果てにあるムシアには、巡礼路到達点0kmの道標が別にあり、そして舟の聖母教会がある。

ムシアはサンティアゴのイスパニア伝道の際、困難を抱えて意気消沈するサンティアゴを励ますために、石の舟に乗った聖母マリアが顕現した場所であり[32]、舟の聖母教会はそれを記念して建てられたものである。舟の聖母教会内部は聖母マリアがメインとなっているが、巡礼者姿のサンティアゴ像もある。

また現地に着くまで失念していたが、ムシアは2002年11月13日に約7万5000キロリットルの石油を積んだタンカーPrestigeが2つに折れて沈没し、石油流出事故が起きたところである。ムシアの博物館には多くの事故の写真が展示されていた。大きな事故で甚大な被害があったが、石油は「奇蹟的に」1年で除去することができ、生態系にも影響はなかったそうである。

図34「フィニステレの道」到達点の道標（筆者撮影）

図35 舟の聖母教会（筆者撮影）

図36 ムヒアのポスター

図37 ムシアのポスター

図38 ムシア名物カメノテ

1936年から1939年のスペイン内戦に勝利したフランコ独裁体制下では、国家語として唯一カスティーリャ語が存在するのみとされ、ガリシア語といった地方語は公的な場においての使用を禁じられた。独裁政権下で現在のムシアはスペイン語のムヒアであり、民主化後はムシアと呼ばれるようになったものの、聖母の祝祭のポスターでの表記が年ごとに異なっていた。理由を尋ねたところ、村の名前の発音がムヒアかムシアかは今も時の村長の考え次第で決まるそうである。ムシアの名物は漁師が命がけで採るというカメノテというフジツボのような海産物で、大変おいしく、こちらが食べ方に戸惑っていると、店の他の客が「指をもいでシャツを脱がせるのさ」と説明してくれたのがおもしろかった。

おわりに

サンティアゴ巡礼を経験している人は非常に多く、2018年に一般向けの公開講座を開いた時には、来場して頂いた方々から「実際に巡礼を経験せずにはサンティアゴについて講じる資格なし」と、本文でも触れたユネスコ世界遺産指定についての記事に対する批判と同じような意見を数々頂いた。これまで研究対象としてある程度遠くからサンティアゴ巡礼路を見てきたが、実際にサンティアゴ巡礼を体験すると、確かに見える世界がかなり変わってきたように思う。今日の巡礼はサンティアゴ大聖堂を目指して歩いているとはいえ、宗教的な動機よりもかなり曖昧な個人的プロジェクトとして巡礼をする傾向が見られ、カトリック教会が喧伝しているような「絶え間ない伝統でスペイン教会において決して中断されることのなかった」[33]ものだとみなすことは難しい。途中にある「中世の道の様子がうかがえる」フレロスの橋もあくまで中世風の装置に過ぎない。徒歩巡礼と「研究の道」は別物であり、今回は歩き続けることに必死で巡礼路の近くにある建築物を見回るゆとりはなかったが、土地勘ができ『案内記』やその他のサンティアゴ関連史料に出てくる地名の地理的条件については理解がかなり深まったように思う。

注　釈

1 Herbers, K., *Papado, peregrinos y culto jacobeo en España y Europa durante Edad Media,* Universidad de Granada, 2017, p.119. ランスの司教チュルパンが書いたとされる年代記には778年のシャルルマーニュのスペイン遠征中に「シャルルマーニュの夢に現れた使徒サンティアゴは、星の道に従い、使徒の柩を発見し、スペインをイスラーム教徒から解放するよう命じた」とあり、12世紀と13世紀の中央ヨーロッパにおけるサンティアゴ崇敬の著しい増加に大きく影響した。（日本語訳は引用者）

2 フィールドワークを行った日程は、2019年８月25日サン・ジャン・ピエ・ド・ポーからロンセスバジェス、８月30日サリアからポルトマリン、８月31日ポルトマリンからパラス・デ・レイ、９月１日パラス・デ・レイからアルスア、９月２日アルスアからラバコジャ、９月３日ラバコジャからサンティアゴ・デ・コンポステラである。

3 Herbers, K., *op. cit.,* p.243.（日本語訳は引用者）

4 小川ジュヌヴィエヴ・F.,「サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼路ー巡礼のその先に何を見るのか」『明治大学教

養論集』397号、97-122頁、103頁。火山の噴火によって出現した盆地の中にある町 Le Puy en Valey は、キリスト教化される以前のケルト時代から聖域とされ、ケルト時代から受け継がれている「奇蹟の石」や「黒い聖母」で有名な場所である。「ル・ピュイの道」（Voie du Puy）は、951年に最初の巡礼者ル・ピュイ司教ゴデスカルクが開いた道だとされ、標高625mのル・ピュイから標高1307mの難所オルブラックを超えて、ピレネー山脈に向かう。今回の巡礼でもピレネーで会った巡礼者はル・ピュイから始めている人が多かった。Harbers, K., *op.cit.*, p.75. 実際にはゴテスカルコよりも前の930年に聖職者による巡礼があったという記述があり非常に古い歴史のある道である。

5 ミゲル・デ・ウナムーノ・イ・フーゴは、バスク出身の「98年世代」の哲学者で妻もバスク人である。サラマンカ大学学長などを歴任したが、アルフォンソ13世やプリモ・デ・リベラ独裁政権を批判したとして追放された。

6 *Códice calixtino* (trad. y notas Moralejo, A., Torres, C., Feo, J.), Libro V, Alvarellos editora, 2016, p.26. バスク国にはポー・ド・シゼ（Port de Cize）と呼ばれるとても高い山がある。なぜならそこにスペイン門が発見された、ないしは前述の山から土地から土地へ必需品が運ばれたからである。*Códice calixtino,* p.107. まずは*portus*をpuertoすなわち門と説明するのが語源的にも一致し正確であるが、portareすなわちllevar（運ぶ）も同じ語根に由来するため近似している。（日本語訳は引用者）

7 グザヴィエ・バラル・イ・アルテ（杉崎泰一郎監修、遠藤ゆかり訳）『サンティアゴ・デ・コンポステーラと巡礼の道』創元社、2013年、67頁。

8 渡邉昌美『巡礼の道ー西南ヨーロッパの歴史景観』中公新書、1980年、35頁。

9 グザヴィエ・バラル・イ・アルテ、前掲書、67頁。

10 *Códice calixtino,* p.26. 日本語訳は引用者。

11 グザヴィエ・バラル・イ・アルテ、前掲書、71頁。

12 *Códice calixtino*, p.27. 日本語訳は引用者。

13 土井晴美『途上と目的地:スペイン・サンティアゴ徒歩巡礼路 旅の民族誌』春風社、2015年、181-182頁。

14 『ローランの歌 狐物語 中世文学集Ⅱ』（佐藤輝夫訳）ちくま文庫、1990年、208頁。

15 *Códice calixtino*, p.27. 日本語訳は引用者。

16 *Códice calixtino*, pp.14-15. 日本語訳は引用者。

17 Pulgar, F., *Crónica de los Reyes Católicos* (ed. Carriazo, J.M, 1, Granada, 2008, Capítulo CXCV.「両王はベナベンテ伯から（ガリシアの）レモス伯の反乱の報を書簡とメッセージで受け、ガリシア王国へ向かい、武器をとり反乱を命じたかの伯に、公正な方法で処置するために都市コルドバを出発した。（ガリシアは）カスティーリャの王たちがほとんど訪れなかった場所である。…両王と（ベナベンテ）伯は、ガリシア王国に入り、ディエゴ・ロペス・デ・アロを総督に据え、サンティアゴの教会を訪れ、寄付を行った…」。翻訳括弧内は引用者による補足。

18 グザヴィエ・バラル・イ・アルテ、前掲書、70-73頁。

19 *Códice calixtino*, p.15. 日本語訳は引用者。

20 大畑勝代「“サル河のほとりにて” ロサリア・デ・カストロの世界」『関西外国語大学研究論集』53号, 73-93頁、80頁。「虐げられた生活の唯一の脱出口は、おきまりのスペインの他の地方への出稼ぎ（スペイン各地にガリシア人の刈り入れ労働者、門番、刃物とぎがきた）と、遠く海を渡ってアメリカへ移民となっていくことであった。このように貧しいガリシア人は他のスペイン人の軽蔑と差別の対象となる。

21 De Castro, Rosalía, *Cantares Gallegos* (ed. Carballo Calero, R.) ,Madrid, Cátedra, 1993, pp.121-123.

22 ハーペイ・カーケリング『巡礼コメディ旅日記ー僕のサンティアゴ巡礼の道』みすず書房 、2010年、326頁。

23 *El País* 30/04/2007 https://elpais.com/sociedad/2007/04/30/actualidad/1177884004_850215.html（最終閲覧日2019年11月28日）

24 *20 minutos* 03/09/2019 https://www.20minutos.es/noticia/3750784/ 0 /obesidad-espana-crece-eeuu-segundo-pais-europa/（最終閲覧日2019年11月28日）

25 *Códice calixtino*, p.94. 日本語訳は引用者。

26 シャーリー・マクレーン『カミーノー魂の旅路』飛鳥新社、2001年。ベストセラーとなったパオロ・コエーリョの『星の巡礼』と並んで、現代のサンティアゴ巡礼興隆の直接的契機となった巡礼記として頻繁に言及されるものである。

27 2018年の統計によると純粋な宗教的動機による巡礼は42.78%である。なお同年の統計で5665（1.73%）いた韓国人巡礼者が2019年の巡礼時にも目立っていた。 http://oficinadelperegrino.com/wp-content/uploads/2016/02/peregrinaciones2018.pdf

28 竹川郁雄「四国遍路における現代のお接待」、令和元年10月27日、愛媛大学南加記念ホール。

29 Herbers, K., *op. cit.*, p.243-273.

30 *La voz de Galicia* 24/06/2016 https://www.lavozdegalicia.es/noticia/carballo/fisterra/2016/06/24/cabo-fisterra-tendra-

vigilancia-impedir-fuegos/0003_201606C24C5996.htm（最終閲覧日　2020年１月７日）

[31] *Vive el Camino* 24/08/2016　https://vivecamino.com/detenida-una-pareja-de-peregrinos-por-provocar-un-incendio-en-el-cabo-de-finisterre-no-194/

[32] マリニョ・フェロ、ホセ・ラモン（川成洋監訳）「サンティアゴと小舟の聖母」『サンティアゴ巡礼の歴史ー伝説と奇蹟』原書房、2012年、26-27頁。

[33] Alvarez Lozano, E., *Compendio de la vida, martirio, traslación e invencion del glorioso cuerpo de Santiago, el Mayor,* Apóstol de J.C. Patron de las Españas, Santiago de Compostela, 1858, p.14.

付　記

本稿は、愛媛大学 四国遍路・世界巡礼研究センター 2019年研究集会での発表内容「中世後期におけるカスティーリャ王権とサンティアゴ巡礼の「衰退」」に依拠したものである。

謝　辞

本研究は、JSPS科研費「スペインとメキシコにおける聖ヤコブ信仰の継続と変容の統合的分析」（17K02037）の助成を受けたものである。